



Data

監督: 吉田大八
原作: 山上たつひこ、いがらしみきお『羊の木』(講談社イブニングKC刊)
出演: 錦戸亮/木村文乃/北村一輝
/優香/市川実日子/水澤紳吾/田中泯/松田龍平/中村有志/安藤玉恵/細田善彦/北見敏之/松尾諭/山口美也子/鈴木晋介/深水三章/川瀬陽太/木原勝利/白神允/中沢青六

■■■ショートコメント■■■

◆公式ホームページによれば、本作の「イントロダクション」は次の通りだ。

山上たつひこ(「喜劇新思想体系」「がきデカ」)、いがらしみきお(「ネ暗トピア」「ぼのぼの」)という日本ギャグマンガ界のレジェンドが、原作と作画でまさかのタッグを組んだ超問題作「羊の木」(講談社イブニングKC)。過疎対策として仮釈放された元受刑者たちを受け入れた架空の町を舞台に、過去に凶悪な罪を犯した“新住民”と市民とのせめぎあい、人間が抱える恐怖の深淵に迫った本作は大きな衝撃を与え、2014年(第18回)文化庁メディア芸術祭優秀賞に選ばれた。そして、2018年。これからの社会を予見するような不穏な設定と「元殺人犯という“究極の異物”との共生」というセンセーショナルテーマはそのままだ、この傑作コミックが新たな物語としてスクリーンに登場する!

映画化を手がけるのは『桐島、部活やめるってよ』(2012)で日本アカデミー賞最優秀作品賞・最優秀監督賞をダブル受賞し、『紙の月』(2014)では同優秀監督賞を手にした日本映画界のトップランナー、吉田大八監督。原作の設定やエッセンスを活かしつつ、完全オリジナルの結末を創造。クライマックスで主人公を待ち受ける衝撃の展開は、見た人の感情を深く揺さぶるだろう。

そして、日本映画界屈指の実力派キャストが集結。強烈な磁場を発する受刑者たちの間を右往左往する主人公の市役所職員・月末一には、錦戸亮。さらに木村文乃、北村一輝、優香、市川実日子、水澤紳吾、田中泯、松田龍平ほか、演技派たちのアンサンブルがさまざまな化学反応を引き起こし、ここに、人間の本性を炙り出す極限のヒューマン・サスペンスが誕生した。

◆公式ホームページによれば本作の「ストーリー」は次の通りだ。

さびれた港町・魚深（うおぶか）に移住してきた互いに見知らぬ6人の男女。

市役所職員の月末（つきすえ）は、彼らの受け入れを命じられた。

一見普通にみえる彼らは、何かがおかしい。

やがて月末は驚愕の事実を知る。

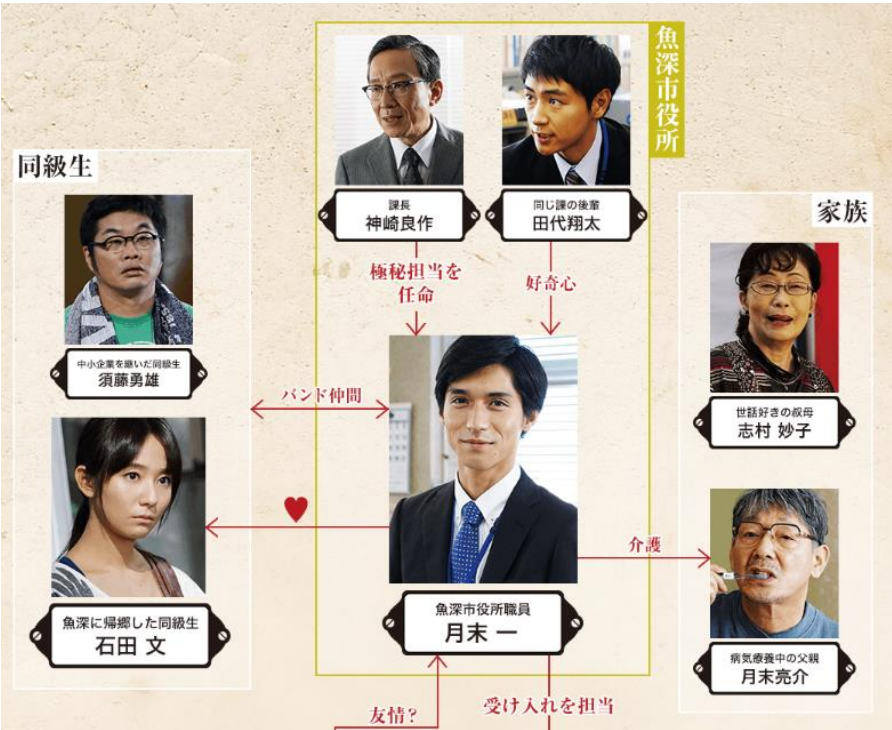
「彼らは全員、元殺人犯」。

それは、受刑者を仮釈放させ過疎化が進む町で受け入れる、国家の極秘プロジェクトだった。

ある日、港で発生した死亡事故をきっかけに、月末の同級生・文（あや）をも巻き込み、

小さな町の日常の歯車は、少しずつ狂い始める……。

◆本作で主演となる、魚深市役所職員の月末一を演じる錦戸亮を中心に関係者たちのキャストは次の通りだ。



◆また、魚深市が受け入れる6人の元受刑者たちは次の通りだ。



◆ホームページやチラシさらに新聞の広告では、「素性の知れないものたち。信じるか?疑うか?心揺さぶる衝撃と希望のヒューマン・サスペンス!」「かつてない衝撃の感動。究極のサスペンス・エンタテインメント!!」等の文字が躍っている。また本作の監督は『紙の月』(14年)の名作ぶりが際立っていた吉田大八監督だから、私は大いに期待したが、残念ながら期待外れ。

2月2日付朝日新聞夕刊における本作の宣伝では、「集中力を数値化できるのなら、鑑賞中に、新記録を樹立したかもしれない。登場人物の一举手一投足に勝手に怯え、安堵し、落ち着かない自分の心の物差し不安定さ。私たちでは測れないものが確かに描かれている、真つ暗に光る一作。」(作家・浅井リョウ氏)、「人間の滑稽さ、おそろしさ、やさしさ、冷たさ、温かさなどすべてが濃縮されて描かれていて、人間ドラマとしてとても興味深い

だけでなく、サスペンス映画、ミステリーとしても最後まではらはらどきどき楽しみました。」(法政大学・犯罪心理学の越智啓太氏)等と絶賛されていたが、これってホントにホント・・・？

◆とある地方都市で過疎化に悩む魚深市役所が一石二鳥の策として立てた、元受刑者を雇用するという企画はいいアイデア。個性的(?)な6人の元受刑者たちを受け入れた魚深市で起きる人間ドラマは、分析の仕方、描き方によってはたしかに面白そう。しかし本作では、まず6人のキャラがあまりに皮相的。同じ日に観た『スリー・ビルボード』(17年)での登場人物たちの奥深くに分け入った描き方とそのストーリー展開の意外さに、ビックリかつ感服させられただけに、両者のレベルの違いにビックリ。前述した浅井リョウ氏や越智啓太氏のコメントは『スリー・ビルボード』にこそ相応しいものだ。

◆清掃員として働く栗本清美(市川実日子)や、介護センターで働き、月末一の父親で病氣療養中の月末亮介(北見敏之)と恋に落ちる太田理江子(優香)のバカげたストーリーを見てると、これをホントに吉田監督が演出したの?と思ってしまう。また、クリーニング店で働く元ヤクザの頑固じじい大野克美(田中泯)や、理髪店で意外にいい腕を見込まれている福元宏喜(水澤紳吾)のキャラも、そこだけ目立たせた単純で、バカげたもの。

さらに後半で主役ぶりの活躍を見せる、宅配業者の宮越を演ずる松田龍平も、『探偵はBARにいる』(11年)、『シネマルーム27』54頁参照)、『探偵はBARにいる2 ススキノ大交差点』(13年)、『シネマルーム31』232頁参照)、『探偵はBARにいる3』(17年)の演技で、持ち味がパターン化しているのが気がかり。他方、何か問題を起こしそうだが、あっさり宮越の車で轢き殺されてしまう釣り船屋の杉山勝志(北村一輝)もあんな形でジ・エンドでは、一体何のために本作に出演したの?

◆そんな悪口を書いていけばいくらでも書けるが、それではあまり生産的ではないので、ここまでにしておこう。あえて1つだけ質問すれば月末亮介との結婚を本気で考えていると宣言し、介護センターの中で秘かに月末亮介と濃密なキスを交わす太田理江子は、ひょっとして色情狂いわゆる色きちがい・・・？

◆同じ日に観たジョン・ウー監督の『マンハント』(17年)では①アクション、②美女軍団、③ロケ場所に感心すると共に、そのスピード感、躍動感に興奮させられた。ところが本作ではそれはまったくなく、まったく同じテンポで、一人一人の物語が語られ、同じカメラワークで同じ映像が現れるだけ。食事をしながら、また途中トイレで中断しながら見るテレビドラマならこれでいいだろうが、料金を払って1人で見る映画の演出としてこれではいかげなもの・・・？

同じ日に観た『スリー・ビルボード』や『マンハント』が両作ともメチャ面白かっただけに、本作のくだらなさがより顕著に。しかし、こんなくだらない映画ばかり作って日本の映画界は本当に大丈夫なの・・・？

2018 (平成30) 年2月16日記